

瀬川昌久・西澤治彦編訳

中国文化人類学リーディングス

風響社／2006年12月／354頁／3000円



田村和彦

中国に関する飛躍的な情報量の増大は、目を見張るものがある。かつてより主流であった古典文学や歴史、国際政治などの分野に加えて、近年増大が著しい領域は、生活や社会といった事象の一部をなす情報であろう。人やモノの盛んな往来は、今までにない状況を生み出しつつある。

書店には中国に関する書籍が積み、テレビをつければ連日のように中国の生活や文化に関する報道が流れている。この状況のなかで生きる我々ほどの程度、中国社会についての理解を深めてきたであろうか。

急速な情報回路の変化は、なにも日本側からみた現象にとどまるわけではない。評者のフィールドとする陝西省の農村では、水道の敷設もいまだ十分ではないが、二〇〇七年からブロードバンドサービスが開始され、株価に関する情報を収集したりアジアのアニメを閲覧したりする人々が現れている。

こうした知識の回路が睥睨すべき変化を見せ、細分化された情報量が急増する一方で、我々はそれらを理解する枠組みを十分に発達させてきたであろうか。対象の多様化のなかで、問題の設定を規定する視座への内省を深化させてきたであろうか。ともすれば、従来、接触することが困難であった種の情報、例えば、中国での生活体験や農村における観察

記録、記録文書の束といった情報の奔流のなかで、思考の基礎となるべき学問的背景すらかすんではいないだろうか。

「根深葉茂」という言葉ある。学問領域全体にもこの叡智があてはまるとすれば、今日のこうした状況の中でこそ、人類学的中国理解のあり方を形成してきた重要な諸研究に改めて向き合うことで、自己の研究の位置づけを確認する必要がある。あわせて、文化人類学という比較的小さな社会単位を直接の調査対象としてきた学問が、中国という高度に入り組んだ複合社会をどのような視点から捉えてきたのか、検討すべき時期に来ているといえよう。

中国においても『民国時期社会調査叢編』(二〇〇四—二〇〇五年、李文海主編、全十巻)の刊行に見られるように、中華民国時期に行われた社会調査が復刊され注目を集めるなど過去の調査記録が再検討されつつある。これらの動向は、かつて研究史のなかで概略が触れられるにとどまった記念碑的論考を原文のまま提供することで、関連分野の研究の活性

化を導いている。また、一九八〇年代中葉から勃興した新たな社会史や民間社会研究などの脱学問領域的研究において、歴史学、社会学と並んで文化人類学の理論や調査法が頻繁に参照されている。そこで求められている人類学への期待は、教科書的な人類学の対象や手法の定義による棲み分けではなく、具体的な研究のなかでの対象把握、理解のあり方、いわば人類学的視角が問われているように思われる。

このような情勢にあつて、本書の出版はまことに時機を得たものといえよう。本書は文化人類学のリーディングスではあるが、「中国社会のメカニズムをどのように捉えるか」「文献資料と現地での観察を有効に統合するにはどのような方法があるのか」「ミクロな観察からどのように巨大な社会を検討するのか」といった、およそ中国研究にかかわる誰もが直面する問題系を考えるための手がかりがここにはある。このことから、「中国社会の底流に肉迫しようとする学生や若手研究者により活用され、より深い中

国社会の理解と、新たな研究課題の着想に貢献することを期待する」(三三二頁)という、謙虚な編者の言葉を越えた幅広い層の読者が手に取ることとなる。今後、文化人類学による中国研究において必読の文献となることはいうまでもない。

本書の編者について改めて紹介する必要はないだろう。瀬川昌久、西澤治彦両氏(以下、敬称略)とも一九五〇年代生まれで、一九八〇年代にフィールドワークを開始した、人類学的中国研究を牽引する研究者である。瀬川には近著に『中国社会の人類学——親族・家族からの展望』があり、そのなかで親族研究からみた欧米、中国、日本における研究史をまとめている。西澤は、中国において人類学が本格的に復興され始めた一九八〇年代の早い時期より漢民族研究の研究動向を整理するのみならず、本書の大きな魅力のひとつともなっている、中国における人類学研究的萌芽期を紹介する先駆的な作業を行っている。両者はまた、ごく最近では、『季刊民族学』「特集・中国を

知る」において、具体的で等身大の中国社会を描き出す作業に加わっている。

この意味で、「中国社会に関する人類学的な論考の中でも、研究史上とりわけ重要な意味をもつと考えられるいくつかの論文を厳選し、リーディングスとしてまとめる」(一頁)本書を企画するにあたって、もっとも適切な編者を得たといえよう。

本書には、中国に関心をもつ者にとって必読の十三篇の論考が収められ、うち六篇が本書の編集にあたって新たに訳出されたものである(費孝通の著作に寄せたマリノフスキーの序文はすでに邦訳があるが、今回は改めて訳出されている)。ラドクリフ・ブラウンの講演記録と、ファースの論考、林耀華の論文はすでに西澤によって原文再録と邦訳、詳細な解説が刊行されているが、媒体が紀要であったことから十分に普及していないことも考えられる(なにより原文は日本の図書館には所蔵がなく、中国でもきわめて入手が困難である)。とすれば、九篇の論文は本書によって日本語で広く世

に問われることとなったといってもよいかもしれない。

構成は以下のとおり。

はしがき

序論…中国文化人類学の歩み(西澤治彦)

I コミュニティー・スタディーズと中国人類学

中国鄉村生活の社会学的調査に対する建議(ラドクリフ・ブラウン講演、呉文藻中国語編訳、西澤治彦訳)

中国農村社会の団結性の研究…一つの方法論の建議(レイモンド・ファース、費孝通中国語訳、西澤治彦訳)

費孝通著『中国の農民生活』への序文(B・マリノフスキー、西澤治彦訳)

II 中国研究と社会科学

社会人類学における中国研究の位置(M・フリードマン、末成道男訳)

中国研究は社会科学に何をなしえるか(G・W・スキナー、西澤治彦訳)

中国史の構造(G・W・スキナー、瀬川昌久訳)

III 親族研究のパラダイムとその行方

人類学の観点から考察する中国宗族鄉村(林耀華、西澤治彦訳)

王朝時代後期中国における親族組織・序文(P・B・エブリー/J・L・ワトソン、川口幸大訳)

房と伝統的中国家族制度…西洋人類学における中国家族研究の再検討(陳其南、小熊誠訳)

IV エスニティーと文化的多様性

さまざまな意識モデル…華南の農民(バーバラ・ウオード、瀬川昌久訳)

中国の葬儀の構造…基本の型・儀式の手順・実施の優位(J・L・ワトソン(西脇常記訳)

「イ族史」の歴史(S・ハレル、高山陽子訳)

エスニティーの探求…中国の民族に関する私の研究と見解(費孝通、塚田誠之訳)

あとがき(瀬川昌久)

各論文にはそれぞれ、著者の紹介から背景にいたるまで、適切な解説が施されているので、文化人類学を専門とする者

でなくとも理解を深めることができる。よって、以下では個別の論考を逐一取り上げるのではなく、それぞれの分野ごとに検討したい。ちなみに、四つに分けられた分野はほぼ論考の発表時期と重なるため、通読すれば文化人類学による中国研究の学説史としても読むことが可能である。もちろん、収められた論考自体は、独立した個性の強いものであるから、読者の関心にしたがって読み進めても一向に問題はない。

「コミュニティ・スタディーズと中国人類学」では、一九四九年以前の、中国において機能主義的理解の仕方が紹介され、受容されてゆく過程の諸論文が集められている。中国にとっては、社会学、人類学において量的調査から質的調査への道が開かれ、コミュニティ・スタディーズという研究方法が浸透する重要な時期である。一方で、人類学からみれば、小規模な集団の調査から確立した参与観察という新たな調査手法を、より複雑な社会へと適用してゆくための模索の時期であった。ラドクリフ・ブラウン

の、統合されたコミュニティとして郷村を調査の手始めとし、その集合体として中国の全体へと至ろうとする研究の展望も、フアースによるひとつの村落調査から開始して、対象を拡大する手法の建議も、中国研究に対して、文化人類学はどのような接近が図れるのか、当時の人類学にとつての応用を試みた意欲的な論考である。もちろん、今日の地平からは、郷村を適応と統合を兼ね備えた基本的なユニットとみなし積み木を積み上げるような思考がどこまで中国社会を捉えるうえで有用なのかといった問題や、ひとつの村落の総合的調査で得られた関係の回路のみで中国のあらゆる超村落的な関係を考察できるのかといった疑問もある。しかし、我々が注目すべきは、巨大な対象を前にしつつも研究対象へのアプローチを徹視的な手法に設定し、全体的な関心の上にたつて、外部社会との関係や自立度を検討する方向を指し示したことではないだろうか。加えて、両者は社会改革や成果の応用といった実用について温度差こそあれ言及している点も興

味深い。この傾向は、費孝通の著作へ寄せられたマリノフスキーの序にいたつて頂点に達する。「応用人類学の憲章」と絶賛するこの文章には、今日の中国における人類学、社会学の主要な認識が凝縮されており関心を引くとともに、一九三〇年代における彼の研究について知らなければ、従来の、心理主義的傾向の強い参与観察法の確立者としてのマリノフスキー像とは容易に一致しないであろう「清水一九九八」。ここで取り上げられた著名な人類学者の文章は、中国という文化人類学にとつて挑戦的な研究対象に彼らがどのような関心を見出していたかを映し出している。

ところで、この三篇の論文を繋ぐ接点には、燕京大学という研究教育機関である。日本では、晩年に鳥居龍蔵が招聘されたことで知られるが、民国期に社会学を設置したいいくつかの大学のうち、今日の中国における社会学、人類学を考える上でもっとも重要な位置を占めることは学説史の示すとおりである。ここで行われたラドクリフ・ブラウンの講義およ

びファースの論考は、機能主義的社會理解の方法として大きな影響を及ぼした。

呉文藻や實際の學生指導にあつた楊堃らのもとで、少なからぬ學生たちが調査研究を行い、實際の調査過程で直面する様々な問題のなかで独自の見解を生み出していたことはあまり知られていない。

この成果は、すべてがいわゆる人類学的な論文ではないし、質にも大きなばらつきがあるが、百篇を超える卒業論文（一部は修士論文）として保存され、西澤の紹介にあるように本書第三章の林耀華論文の原型などもここに含まれる。一九二〇年代の論文群がアンケート調査を中心とする概括的な研究にとどまるのに比して、ここで取り上げられた機能主義的研究の紹介が行われた時期には、参与観察や対面調査での口述を取り込む具体性の豊かな研究へと発展し、質量ともにとても充実した時期を迎えている。評者も以前楊堃の指導した卒業論文の傾向と問題について検討したことがあるが、全体的な状況は趙麗と朱謙の近著に詳しい（趙・朱二〇〇七）。このことから、

当時の最先端であつた人類學理論が導入され、中国の學問的状況に大きな刺激を与えたことを見て取ることができる。またそれだけに、日本の侵略による同大学のプロジェクトの挫折は惜しまれるのである。

当時の燕京大学が、我々を惹きつけるのは學史上のものだけではない。郊外の農村実験区にて集中的に行われた調査記録は、現在でも優れた資料として独特の輝きを放っている。Robert RedfieldやArthur Wolf、Stephan Feuchtwangらによる、中国を研究する人類學者にはなじみのある理論的枠組みを援用しつつ、燕京大学卒業論文の資料記録を駆使して新たな研究地平を切り開いた楊念群の論考はこの調査記録の重要性を物語るものである（楊二〇〇四）。

「中国研究と社會科學」に収められた論文はフリードマンとスキナーの手による論考となっている。両者はともに、外国人による中国本土でのフィールドワークが事実上不可能であり、再開の目処もたない中で主要な著作を発表してい

る。人類學にとって主要な調査および思考の手段を使用できない状況は、中国研究の衰退を招いても不思議ではない。しかし、實際には研究対象の拡大と、それに付随する、あるいはそれを促した理論面での発展により、今日の研究上の基礎に直接的影響を与えているのがこの時期の研究にあることは特筆すべきであろう。とくに、ここに掲げられた論考はともに、従来のコミュニティー・スタディーの域を超えて、中国を理解するための新機軸を見据える視座を提唱するものである。ここでの、フリードマンによる、コミュニティー・スタディーに対する批判は行論のうえでは相当に手厳しいが、その手法を全面的に捨て去るのではなく、むしろ村落への注視だけでは十分な理解を得られない、それでいて中国社会を考察するうえで欠くことのできない問題を指摘したものと読むことができる。同じく、スキナーの議論も、おなじみの村落内で完結する議論ではなく、地理的にも歴史的にもダイナミックな議論は文化人類學者にとってかなり異質で魅

力あふれるものとなっている。ここで示された枠組みは、それを援護するものであれ、反証するものであれ、大いに後の人類学的中国研究を実証的なそれへと導くこととなった。その意味での意義は計り知れない。

理想的とはいい難いにしても現地調査が可能となり、個別の地域、村落に関する報告が蓄積されつつある現在、自らの調査研究を位置づける意味でも、ここに取り上げられた論考は、本書の中でも非常に示唆に富んだ部分といえよう。

「親族研究のパラダイムとその行方」に収録された三論考は、前述のフリードマンとの関係が深いものとなっている。すでに西澤による周到な説明から明らかのように、林耀華の論文はフリードマンの代表的著作のひとつである『東南中国の宗族組織』に大きな影響を与えたことが知られている（なお、西澤による初出の文献紹介には貴重なインタビューの記録と、入手困難な原文の全文掲載があるので、こちらもあわせて読まれることをお勧めする）。また、マリノフスキー追

悼記念講演での彼の予言は、のちにアメリカにおいて、歴史学者と人類学者の生産的な協力関係という形で実現し、両者の相互補完的な関係の例として挙げられていた親族組織に関する概念の基本整理は、本章に掲載されたワトソンの序文で試みられるといった具合である。フリードマン的な親族理解が標準化してゆくことに対して、陳其南は中国語のもつ語彙の意味に基づき、フリードマンを中心とする欧米人類学者の親族研究を再検討する立場を明確に打ち出している。解説でも指摘されているように、高度な整合性のある説明が提示される一方で、評者のような泥臭いタイプの調査者には理念の説明として興味深いものではあるが、社会に埋め込まれた生活の局面で起こる様々な運用についてどの程度有効であるかとの感触も残る。いずれにせよ、文化人類学が均質的とされたアフリカ各地の事例に基づき単系出自理論を練り上げるなかで、フリードマンは中国という广大で高度に階層化された社会の事例から相対化することで、人類学のフィールドと

しての中国を確立するに至った。その触発のもとに、華人社会、香港、台湾といった調査可能な地域から数多くの研究が生み出され、中国の親族に関する研究が大いに深化してゆく状況を読み取ることができる。

中国の親族に対する研究は、人類学全体の親族研究の減少に比例するように低調となっている。しかし、このことが、研究地域における家族、親族の重要度が低下したことを意味するわけではない。人的紐帯は依然として行動を決定する重要な資源であるし、なかでも家族、親族に関するそれは、もつとも基幹となる意味の核を備えている。直接的に対象とする現象がいかなるものであれ、フィールドで考察することを中心に置くかぎり、今後も中国社会の理解を目指すうえでこれらの議論の成果が不可欠となることは間違いない。

約七〇年にわたる、人類学的中国研究のエッセンスを厳選した本書にあつて、「エスニシティと文化的多様性」としてまとめられた諸論文は、比較的最近

のものを中心としている。調査研究のま
なざしや、隣接する社会科学との関係、
親族といった明確なテーマでくくられて
きた本書のなかでは、取り上げるテーマ
の多様さから本章に特出した感想を評者
は抱いた。ウオードとワトソンの論文で
は、中国らしさ (Chineseness) とはな
か、それを支える仕組みについて興味深
い議論が展開される。とくに、ウオード
の論考はこの中でもっとも古く、何度
か紹介されてきたが、自家製モデル、内
部観察者のモデル、そして信じられてい
るところ伝統的モデルを設定すること
で、意識モデルを検討する人類学的議論
のなかでも色褪せない魅力をもってい
る。

ハレルによるイ族の歴史研究を時間軸
のなかで捉えなおす作業は、研究におけ
るパラダイムの変遷を鮮やかに浮かび上
がらせており、刺激的である。イ族研究
を題材としつつも、ここで語られている
ものは紛れもなく中国の人類学、民族学
である。巻末を飾る費孝通の論文は、お
そらく近年の中国の人類学のうちもつと

も広く読まれたであろう「中華民族多元
一体構造」論と補完関係にある。多くの
議論を呼んだこの概念がどのような背景
のもとで形成されてきたかを知ることが
できるのみならず、費孝通という中国に
おける人類学の発展を体現する巨人の回
顧は、本書の末尾にふさわしい選択であ
ると思われる。

本章の論考が直接向き合う具体的な
対象は異なっているが、その射程の長い
理解のあり方は、いずれも優れて示唆的
であり、スリリングですらある。あまり
学説史的な側面に関心がない読者であつ
ても、この章から得られるものは大きい
のではないだろうか。

以上、『中国文化人類学リーディング
ス』に収録された論文を駆け足で紹介し
たわけだが、実は特記すべき項目がこの
ほかにある。それは、ほかならぬ編者
によって記された「序論」と「あとが
き」である。序論では「漢族研究の歩み
——中国本土と台湾・香港」「西澤一九
八八」に近年の動向を補充するかたちで
研究史と主要な文献表がまとめられ、あ

とがきでは総括として中国、欧米、日本
の研究背景をもとにそれを読み返す試み
がなされている。本書の前後に配置され
たこれらの論考が、人類学的中国社会研
究の航海図として読者に手渡されること
で、発表時期も知的背景も異なる個性
的な論文群を有効に読み進めることがで
き、リーディングスの価値を高めている。
少なくとも評者には、大学で人類学
の授業を初めて受けたときの、世界が広
がるような興奮と、古典を読むという範
囲を超えた、状況に参加している臨場感
をもたらした。

人類学的中国研究についていえば、研
究の動向や先行研究の整理といった、外
的には中国への人類学的アプローチの紹
介、内的には各自の研究を位置づけ、問
題を明確とするための基礎的作業が堅実
に積み重ねられてきた(例えば、『中国
文化人類学文献解題』など「末成編一
九九五」)。このことは先行研究が豊富で
あるというよりも、先学の地道な学的貢
献に負うところが極めて大きい。本書も
また、この優れた伝統を継承してゆくも

のであることは間違いない。

個別の論考にそれぞれ評論を加えることは、評者の力量をはるかに超えるので、最後にひとつだけ、勉強不足の後学から確認を試みたい。研究史の整理と今後の展望では、どちらの編者も日本の研究状況を含めた検討がなされている。序論の研究史では、前稿で簡単な紹介にとどまった戦前の研究状況が新たに項目立てする形で補強されており、今後の展望では中国、欧米、日本という研究背景の分類枠組みが用いられ、それぞれ一定の評価が与えられている。だが、収録された論考そのものからは、その様子をうかがい知ることはできない。厳選の過程で日本の研究が採択されなかったのであれば仕方がないが、日本の読者を想定した、日本語で書かれ、日本で出版されるリーディングスという条件により除外されているのだとしたら、是非続刊を希望したい。

重要であるにもかかわらず広く読まれない研究を集めて、本書のようなリーディングスを編むことも大きな意義

がある。あるいは、画期的であった『中国社会への視座——日本からの眼差し』のように中国語または英語による発信という可能性も考えられる。今日の中国における学際的な研究状況に飛び込むことで、単なる研究の紹介や動向解説、情報の交流にとどまらず、文化人類学という学問体系における中国研究の位置を確認するとともに、日本において人類学的中国社会研究を行うという営為についても逆照射する作用が期待できるのではなからうか。

参考文献

- 国立民族学博物館友の会編 二〇〇六
『季刊民族学』特集：中国を知る、三
〇巻一号、No. 一一五、千里文化財団、
三二七四頁。
清水昭俊 一九九八 「忘却のかたの
マリノフスキー——一九三〇年代にお
ける文化接触研究」国立民族学博物
館『国立民族学博物館研究報告』二三
巻二号、五四三—六三四頁。
末成道男編 一九九五 『中国文化人類

学文献解題』東京大学出版会。

瀬川昌久 二〇〇四 『中国社会の人類
学——親族・家族からの展望』世界思
想社。

常建華 二〇〇四 『社会生活的歴史学
——中国社会史研究新探』北京師範大
学出版社。

趙麗・朱滢 二〇〇七 『燕大』社会調
査與中国早期社会学本土化实践」李長
莉・左玉河編『近代中国社会與民間文
化』社会科学文献出版社、八八一—
六頁。

西澤治彦 一九九八 「漢族研究の歩み
——中国本土と台湾・香港」末成道男
編『文化人類学5』特集：漢族研究の
最前線、アカデミア出版会、一二—
二頁。

楊念群 二〇〇四 『北京地区』四大門、
信仰與「地方感覚」孫江主編『事件・
記憶・叙述』浙江人民出版社、二一六
—二二二頁。

Suena Michio, J. S. Eades and Christian
Daniels (ed.) 1994 *Perspective on Chinese
Society Views from Japan*, Institute for the
Study of Languages and Cultures of Asia
and Africa, Tokyo University of Foreign
Studies.